沼津市明治史料館通信
二〇二二年一月
通巻148号

■シリーズ沼津兵学校とその人材 104
沼津兵学校の余暇と遊び
■ぬまづ近代史点描 85
共立学校と沼津藩の人脈
■史料館からのお知らせ

**藤沢次謙の画幅**
（旧幕臣大野家資料・当館寄託）

明治４年（1871）春の揮毫。静岡藩少参事・軍事掛として沼津兵学校の管理部門を統括した藤沢次謙は、梅南と号した画人でもあり、幕末に趣味で洋画を学んだことでも知られる。榊綽（篁邨）・河鍋暁斎とともに渡部温訳『通俗伊蘇普物語』の挿図を描いた。

シリーズ　沼津兵学校とその人材　104

# 沼津兵学校の余暇と遊び

兵学校の規則書「徳川家兵学校掟書」の第七六条には、「毎日曜日は諸学休日之事」とある。生徒にとっても教師にとっても休みは嬉しいものだったはずである。明治二年（一八六九）一月二三日、沼津陸軍医学所（後の沼津病院）御用重立取扱の任にあった林洞海の日記には、「今日ソンデなり」とあり、サンデー（日曜日）に千本浜へ行き、親戚である赤松則良・西周一家と地引網を楽しんだことが記されている（拙稿「静岡藩の医療と医学教育―林洞海「慶応戊辰駿行日記」の紹介を兼ねて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五三集）。

野外で体を動かすことは、余暇の楽しみ方の定番だったろう。沼津での林の日記には、「海辺」「郊外」などへの散歩の記述もしばしば見られる。兵学校の生徒の中には、操練用に貸与されたゲベール銃を携え、「屢々郊外ニ出猟」する者もあったらしい（拙稿「荒川重平回想録―昭和から振り返る旧幕臣の幕末・明治―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三六集）。狩猟は単なるスポーツとしての意味ではなく、食料を調達する目的もあったかもしれないが、明治三年（一八七〇）一月、沼津勤番組では人家・往来から一〇丁以内の距離ではみだりに発砲してはならないとの布達を発し、「遊猟」の規制を行った（『山中庄治日記』）。

福井藩から沼津兵学校に留学していた斎藤修一郎は、明治三年夏、やはり沼津に滞在していた山口藩士らとともに富士登山を敢行し、頂上から英気を養ったという（『斎藤修一郎先生懐旧談』）。他藩出身者のほうが江戸から移住した者よりも、富士山への憧れが強かったのかもしれない。

もちろん沼津の町中にも娯楽施設はあり、当時、芝居小屋が二軒、寄席が二、三軒あったほか、浅間神社の境内には楊弓場があり、繁昌していたとされる（岡本昆石「予が英学修業の道中」『同方会誌』49）。

ところで、先述した「掟書」第七六条では、夏土用中にも休業が設定されていた。すなわち夏休みである。第四五条には、教授たちに対し、土用休業中は頭取に届け出れば、領内であれば「旅行」してもよいと規定されている。旅行の目的は、必ずしも娯楽に限られたわけではないかもしれないが、許可を得るまでもなく、届さえすれば自由に移動できたわけである。

**藤沢次謙肖像画**
（藤澤裕武氏寄贈）

写真をもとに描かれたもので、ペルーの画家の手になるという。

沼津兵学校の教授たちの小旅行の例としては、明治二年六月一五日から二五日まで、頭取西周が塚本明毅と同道して熱海に滞在した例がある（川崎勝「西升子日記」『南山経済研究』第一四巻第一・二号）。領内ではないので許可は必要だったろう。塚本は西から頭取の職を継いだ後、四年（一八七一）三月にも修善寺への湯治に赴いた。同行者は渡部温（一等教授方）、石橋好一（二等教授方並）、中根淑（同前）、江原素六（少参事・軍事掛）らであった。沼津を発った彼らは、香貫山の下から狩野川沿いに南下し、古奈温泉に一泊した。翌日は田園地帯をゆっくり歩き、鳥のさえずりを聞き桜の花を愛でながら進んだ。渡部は若い頃に下田に滞在していたことから地理に詳しいと言い、自ら先導役をつとめたが、途中農夫に道を尋ねたところ、道を大きく間違っていたことがわかった。ようやく宿に着き、湯につかった後、宴会になったが、渡部には道を迷った罰として生きたままのニワトリが供された。それを見た皆は大笑いした。帰り道は、往路とは別のコースを選び、北進して海に出て、船を雇って沼津城下に帰着した。風もなく波も静かだった。この二日半にわたった十余里の小旅行は、後々まで楽しい思い出として心に残ったようで、中根はその顛末を漢文に書き残した（『香亭雅談』上、一八八六年）。

教授たちの和気あいあいぶりは、以下のようなエピソードにも表れている。幕府のオランダ留学生だった兵学校一等教授方赤松則良は、トランプを土産に持ち帰っていた。ある日、同僚たちとトランプ遊びに興じていたところ、「侍たる者が賭博の真似をする」とは何事かと、校内でそれを目撃した生徒たちから指弾されてしまった。教授らはそれを恥じ、当局に進退届を提出したところ、閉

門一週間の処分が下されたという（『江原素六先生伝』下篇講演・六六頁）。一六世紀に伝来した西洋カルタは、江戸時代には賭け事に用いられることが多かったからである。

赤松のオランダ土産には、自転車もあったという。江原素六の談によれば、乗ってみろと言われたものの、足が届かず、しかたなく高下駄をはいて乗ったとのこと（国立国会図書館蔵「赤松則良一周忌挨拶」）。ただし、これは維新前のこと、つまり江戸での出来事だったというが、そもそも真偽のほども不明である。

沼津兵学校関係人物たちの、公務から離れたところでの趣味や遊びとしては、漢詩・書画などの同好会的活動がある。現存する「書画俳煎茶発会」の刷物（『近世近代ぬまづの俳人たち』所載）からは、篁邨（榊綽、兵学校三等教授並）、蕙崖（吉田信孝、軍事掛附出役）、高畠藍泉（三代柳亭種彦、兵学校御馬方高畠友吉の兄）ら沼津移住旧幕臣が、地元平民の文人たちといっしょに三島宿において会を催したことがわかる。榊も吉田も兵学校では画学を担当し、絵画を得意としていた。やはり同じ頃開催されたと思われる、沼津宿の旅籠元問屋（荻生家）を会場とした「書画小集」の手書きチラシには、補助者の中に藍泉・篁邨・蕙崖・菱湾（有坂銓吉）の名がある。有坂は沼津郡政方並をつとめた人で、書家として知られた。高畠は明治三年閏一〇月に来沼し、五年（一八七二）三月には上京している。一方、三年一〇月一三日に「本町於元問屋書画会有之」（『元八王子千人頭志村貞廉日記一』）という記録があり、高畠の来沼時期とは合わないが、チラシはこの時のものか。いずれにしても、人々が交流し趣味を楽しんだ一例である。

（樋口雄彦）

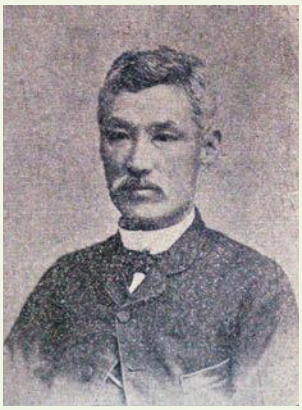
## ぬまづ近代史点描 85

# 共立学校と沼津藩の人脈

昨年、二〇二一年一〇月、新幹線新富士駅の近くに佐野鼎先生顕彰碑が建立された。進学校として知られる東京の私学・開成学園（中学校・高等学校）の前身・共立学校の創立者である佐野鼎（一八三一～七七）は、駿河国富士郡水戸島村（現富士市）の生まれだったからである。郷士の子だった佐野は幕末に砲術を学び、加賀藩に召し抱えられたほか、幕府の遣米・遣欧使節団にも加わり、同藩の軍制改革を担った。維新後は明治政府に出仕したものの、野に下り私立学校を開設するに至った。実は、富士市の隣町である沼津市も、共立学校や佐野とは浅からぬ由縁があることを紹介してみたい。

佐野鼎先生顕彰碑
（富士市）

明治五年（一八七二）一一月に東京府に出された共立学校の明細書には、設立有志一九名として、佐野自身のほか、彼が仕えた旧主である元金沢藩主前田慶寧をはじめ、大倉喜八郎・西村勝三らの名前が並んでいるが（『東京府開学明細書』第四巻）、その中の一人、「神田信三郎」なる人物は沼津藩に関係があった。明治三三年（一九〇〇）撮影の、旧沼津藩主・子爵水野忠敬とその旧臣深沢雄甫・三浦徹・庵地保・松村誠ら全六名が写った写真に、「神田信三郎」も含まれていたのである（沼津市明治史料館編・刊『沼津藩の人材』）。沼津藩士に神田姓の家があったことは確かであるが、明治期の名簿に信三郎の名は見当たらない。ただ、信三郎が旧藩士ではなかったとしても、この写真の存在は沼津藩関係者たちとごく近い立場にいたらしいことをうかがわせる。先述の明細書には、神田が「第一大区小十三区」に借地しているとされていたが、同じ頃、水野忠敬邸があったのも同区矢ノ倉町（現東京都中央区東日本橋）であった。



三浦徹
（『明治肖像録』所載）

沼津藩士出身で、明治期にはプロテスタントの牧師になった三浦徹（一八五〇～一九二五）は、共立学校でイギリス人お雇い教師フリームに明治四年（一八七一）四月から翌年六月まで師事した（『東京教育史資料大系』第二巻・第三巻）。その三浦の回想録には、フリームが日本人女性北川静子と結婚した際のことが記されている（三浦「恥か記」『明治学院史資料集』第八集）。静子は元彦根藩士

深沢要橘
（深澤滋氏所蔵）

水野忠敬
（旧沼津藩士尾崎家資料・当館蔵）

の官僚北川泰明（旧名徳之允）の娘だったが（国立公文書館所蔵文書など）、記憶違いなのか、三浦は北川の旧名を「清左衛門」としているほか、小石川で唐物店を営んだとする。「其女静子を共立学校に入れ教師フリーム氏はいたく静子を愛し遂に婚儀の約なり明治六年六月二十八日共立学校の教員深沢要橘氏生徒神田信三郎氏及び余の三人は其証人として其婚席に立合たることありき」というのが三浦の記述である。神田は共立学校の生徒だったというのだが、残念ながら沼津藩出身だったか否かまでは明記されていない。

フリームの婚儀にも参加したらしいが、沼津藩との関りでいえば、なんといっても創立時以来、共立学校（後に東京開成中学校）で長く英語教師をつとめた深沢要橘（温尭、一八四七～一九一四）の存在がある。沼津藩医深沢雄甫の養子で、杉田玄端に師事したほか、開成所で英学を学び、大学南校で教えた人だった（『東京教育史資料大系』第一巻・第三巻）。一時は校長をつとめたらしく、彼が同校で占めた位置の大きさについては、『東京開成中学校校史資料』（一九三六年）や東京都公文書館に保存される各種学校関係文書の数々が参考になろう。なお、佐野を主人公にした小説、柳原三佳『開成をつくった男、佐野鼎』（二〇一八年、講談社）は、深沢を金沢藩の藩校壮猶館の教授だったとしているが、それは史実ではない。写真専門誌『写真新報』の発行者になるなど、深沢は写真史にも名前を残した。

さらに見落とせない点として、旧沼津（菊間）藩主である子爵水野忠敬（一八五一～一九〇七）が、共立学校の生徒になっていたという事実もある。前掲『東京開成中学校校史資料』に、同校に在学した華族として、公爵徳大寺公弘・子爵大河内輝・男爵前田利武らとともにその名が挙げられているのである。旧主に共立学校で学ぶことを勧めたのは深沢だったのかもしれないし、父が家令をつとめたという関係から三浦だったのかもしれない。

少し時期が下るが、明治一九年（一八八六）に九州から上京し、共立学校に入学した堺利彦は、「共立学校の先生には大学の学生が多かつた。（中略）柿崎さんといふ先生が、寒くなつてからも夏服の金ボタンでやつて来るのが、又一つの評判だつた。それが多分、大阪で有名な弁護士になつてる人だらうと思ふ」（『堺利彦伝』、一九二六年、改造社）と自伝に書いているが、この柿崎とは、沼津藩士の子で、東京帝国大学を卒業し判事・弁護士となり、後に大阪弁護士会会長・大阪府会議員・関西大学専務理事などをつとめた柿崎欽吾（一八六三～一九二四）のことであろう。深沢が学生時代の柿崎を講師に招いたのかもしれない。

とはいえ、深沢・三浦たちと佐野鼎との人間関係が、それぞれの出身地である沼津と富士郡との地理的関係が前提になっていたのかについては不明である。富士郡にも沼津藩領があったが、水戸島村は違う。徹の父三浦千尋は江川坦庵の下で高島流砲術を学んだ高弟だったが、同じ高島流でも佐野は下曽根信敦門下であり、別系統に属した。佐野と深沢が洋学関係でつながっていたことも推測可能だが、現在のところ、沼津藩の人脈と佐野鼎をつなぐ決定的な接点は見出せていない。

（樋口雄彦）

## 史料館からのお知らせ

**臨時休館のお知らせ**

令和４年２月１日（火）から
10日（木）まで、休館します。

**令和３年度第２回企画展**

令和４年２月11日（金）から開催します。

郷土の偉人江原素六の没後一〇〇周年を記念する企画展です。ご来館をお待ちしております。

**沼津市明治史料館通信**

**第148号**

令和４年１月25日

編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社